朝霧さんたち

A×K

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

入学早々、入部したのは恋愛研究部!?
しかも男子は俺だけ!?
クールと、ほんわかと、なにわと
ミステリアスと、高飛車と
ボーイッシュと小悪魔に振り回される
ドタバタ小説!

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 12
第3話 …… 19
第4話 …… 30
第5話 …… 41
第6話 …… 52
第7話 …… 62

第1話

「……ん……んん……」

春眠暁を覚えず……とはよく言ったものだが……。

あと5分という言葉にすごく安心感を覚えるのは俺だ――。

???「おっきろー！」

「……寒……」

???「はいはい、起きるよ！今日から高校生でしよ！かまけないの！」

「……朝から手厳しいよ……秋乃」

新しい制服を着て立っているのは、篠原　秋乃（しのはら　あきの）

俺の幼馴染でよく朝は起こしてもらっている。

……あ、俺？

俺の名前は――――。

秋乃「ほらほら、朝ごはん行くよ？」

「……人が、自己紹介しようとしてるのに……」

秋乃「……??」

「……いや、こっちの話…」

改めて……俺と名前は、赤羽　浩二（あかば　こうじ）
今は普通に朝ごはんを頂いている。
「……卵焼きってさ……奥深いよな」
秋乃「……どうしたの急に……悟りでも開いた？」
「……いや、焼き方とか味付けとか人によって違うじゃん？
奥深いよな～～って」
秋乃「まぁ、言われてみれば……そうかも？」
カチャカチャと皿を洗いながら答える秋乃。
今、俺の家には俺と秋乃しかいない。
母は看護師で夜勤。
父はいない……と、言ってももうかなり昔の話だけどな。
秋乃「……あっ、そうだ……こーくん？」
「……その呼び方……まだやるのか？」

秋乃「ダメ？」
「……いや、ダメではないが……」
こんな感じだが、外に出たら秋乃は……。
秋乃【皆さん、おはようございます♪】
と、ほんわか口調になる。
秋乃「こーくんの前は落ち着くんだもん」
「見透かしてるのかよ」
秋乃「何年の付き合いだと思ってるの？
変な本が2冊くらい増えたもの知ってるからね～」
「や、やめろっ！」
クスクスと笑う秋乃……いや、確かに笑えば可愛い……いや、むしろかなり可愛いよ。
隣で歩くのは勿体ないくらい。
秋乃「さて、行く？♪」
「……早速モードに入ってるし」
秋乃「第一印象が肝心ですから♪」
「……さいですか」
にこやかに隣を歩く秋乃。

……成長したよな、うん……。
秋乃「……？」
「いや、おっきくなったなぁって」
秋乃「……／／／」
痛い、痛いよ秋乃さん。
照れながら拳を何度も打ち込むのやめて、痛い、泣いちゃう。
秋乃「こーくん、そういうとこデリカシーなさすぎ」
「……すいません、つい本音が」
秋乃「思ったことを口にするのが、こーくんの良いとこでもあり悪いとこでもあるよ？」
「……はい」

元々、秋乃とは小学校からクラスも一緒、家も隣同士ということあり何かと縁はある。
……しかし、秋乃はある症状が……。
【おっ、あの子可愛い～～】

【声掛けてこいよ！】

秋乃「……」

「秋乃！出てる出てる！」

無言で怒りながら拳を握りしめる秋乃。

そう、極度の男性恐怖症なのだ……それも過激な方の。

……え？なんで俺とは話せてるかって？

本人に聞いたところ……。

秋乃【ほら、こーくんって男の子って言うよりは犬っぽいところあるから♪】

【犬う!?】

って、事らしい。

つまり、秋乃からみて俺はペットみたいな存在って訳だ。

秋乃「……そんなんじゃ……ないけど……」

「なんか言ったか？」

秋乃「んーん、こーくんって変態さんだな～って」

「……えっと、どこをどう切り取ればそうなるのでしょうか？」

秋乃「あ、知りたい？えっとね～……」

「い、言わなくていいから!!高校初日から詰むから！」

秋乃「ふふっ、冗談冗談♪言う気は無いよ♪」
「……ほ、ホントに……？」
秋乃「それに、私だけの秘密にしておきたいし♪」
「……え？」
秋乃「あ、今ドキッとした～♪」
「してないよ！」
……ほんわかした中に、あざとさも隠し持っているご様子……。
……敵わないなぁ……。

そんなこんなで俺と秋乃は
クラス分けの掲示板の前まで来た。
「……つっても、俺の場合は1番上がほとんどなんだよな」
秋乃「だね、その光景も見慣れちゃった♪」
俺のクラスは……B組か。
秋乃「あっ、私もB組だった！♪」

「って事は、これで5年連続で同じクラスって事だな」
秋乃「嬉しいくせに～♪」
「うっせ」
秋乃「……私は、嬉しいよ？♪」
「……わ、分かったから行くよ！」
秋乃「照れて可愛いな～少年～♪」
……いや、少年って……同い年だろ。

クラスに入ると……既に人だかりができていた。
「……なんだなんだ？」
秋乃「誰かいるのかな？」
視線の先には……。
「……！」

青い髪を少し掻き上げて、本を読む美少女がそこにいた。
目は赤く、スラッとした足……男子が見入るのは納得だった。
秋乃「……って考えてる？」
「一言一句見透かすなっ！」
……しかし、当の本人は……。
???「……（ゴゴゴ」
何やらお怒りの様子。
無理もないだろう、あんだけの視線が集中すれば本を読むのも一苦労だろう。
それに、男子共のひそひそ話が丸聞こえなのである。
秋乃「こーくん、こーくん……嬉しいお知らせだよ？」
「……え？嬉しい……お知らせ？」
秋乃「こーくんの席、その人の前だよ？」
「……うっ、急にお腹が……」
秋乃「仮病はダメだよ？」
「……持病の癪が……」
秋乃「無いよね？」
「……えーっと……」

秋乃「あ、私こーくんの右隣だ、やったー♪」
そう言うと人の事など気にもかけずそそくさと自分の席に座る秋乃。
無情にも、予鈴のチャイムが鳴った。

（……えっと……）
???「……」
怖い。
オーラが見えるとすれば、赤いオーラが見える。
何だろう、怒ってる、確実に何か怒ってる。
目は合わせられまいと右を向くと……。
秋乃（ニコニコ）
面白がった秋乃が笑顔で俺の方を見ている。
（拷問か、こりゃ……）
後ろからは怒りのオーラを感じるし、右は面白半分で見てくるし……。

【んじゃ、はじめましても兼ねて自己紹介すっぞー】
トドメですか、先生。

番号順で行けば必ず最初なのですが、僕。
【じゃあ、赤羽から】
ですよね！分かってました！はい！
「……えっと……」
あ、しまった……何話せばいいんだろ？
「……あ、あかびゃ……浩二っす……よろしくどうぞ」
【噛んだ】
秋乃（噛んだよ……こーくん）
拝見、夜勤お勤め中のお母様……穴があったら入りたいってこういう事を指すんですね、また一つ賢くなりました……何かを犠牲にした気がしますが。
【……ん、んん……次…朝霧】
「……朝霧さんって言うんだ……怖い人」
朝霧「朝霧です」

……

（えっ、おしまい？）

秋乃「……おー……」

【……え、えーっと……次行くぞ～……？】

先生もたじろぐ中……順調に自己紹介は終わった。

秋乃？……まぁ、いつも通りだったよ、うん。

秋乃「篠原　秋乃です～♪

皆さん、よろしくお願いします……ね？♪」

うおお！と歓声を上げる男子共……しかし、次の瞬間。

秋乃「あ、それと……後ろから声をかけたりしないでくださいね？

グーでいっちゃうと思うので♪」

サーーーーっと血の気が引く音がした。

第2話

秋乃「くっ……ぷっ……あははっ！」
「……笑いすぎだよ、秋乃…」
秋乃「……だって、あかびゃって……あか……くっ、あははっ！」
「この世から自己紹介なんて無くなればいいのに……」
秋乃「昔っから自己紹介って苦手だもんね～」
「……うっさい」
あの一件以来、あかびゃ……あかびゃ……といじられて
クラスメイトとは上手く（？）やっていけそうだ。

朝霧「……（ゴゴゴ」
（……前言撤回…後ろを除いたら……だ）
相変わらず険しい顔をしている……朝霧……さん。
そんな顔をマジマジと見れるはずもなく…後ろからの視線に俺は肩を落とした。
秋乃「こーくん、飲み物買いに行かない？」

「……いきなり高校生っぽいことを言うなぁ…」
秋乃「……？……だって、高校生でしょ？」
「ん、まぁ……そうなんだけどさ…」
立つ瞬間、少しだけ朝霧さんと目が合った。
朝霧「……」
「……」
……なんか言いたげな顔してたのは気のせいだろうか…？

【秋乃　視点】

突然ですが、皆さん
私の隣を歩いてる幼馴染の赤羽　浩二くんこと、こーくんについて話しますね。
もうかれこれ、１０年くらいの付き合いになります。
毎朝、なかなか起きないこーくんを起こすのは結構大変なんですけど……。
結構寝顔が可愛くて、いつも起こすのを少し遅らせたりしちゃってます。
意外と優しくて気が使える面もあるんですが……彼には一点だけ問題点が……。

浩二「どした、秋乃？」
「ううん！なんでもないよっ♪」
普段は、こうしてますが……元は不良だったんです。
中学の頃は、それはそれは…。
訳を聞いても答えてはくれないのですが、高校生になって落ち着いてくれたので良かったとします。
浩二「……なんか今、夫婦みたいって言われた気がするんだけど」
「ま、まぁまぁ……」
……大丈夫、だよね???
「……と言うか…なんか来てない？」

「なんかって何さ、何かって…」
秋乃「ほら、目の前」

確かに、走ってくる人が一名……いや、これ…こっち来てないか？
「え、ちょっ……待っ…」
そのまま抱きつかれるような感じでぶつかった。
秋乃はサッと身をかわし……あらあらと状況を飲み込んでいた。
「な、なんだぁっ?!」
???「いつつ……なによ、もう！」
「いや、ぶつかっといて、それは――――――」
秋乃「こーくん、出てる出てる」
「……あっ、すまん……はぁ、大丈夫か、パツキン」
???「誰がパツキンよ!!」
「……えーっと、じゃあ……富士山？」
???「……は？……って、ど、どこ触ってんのよ!!／／／」
張り手しようとした手を避けて手の感触を楽しんだ。
……うん、この言い方じゃ俺、変態だな。
でも仕方ないよね、そこに山があるんだから（？）
秋乃「……こーくん、この人先輩みたいだよ？」

「え？」
よく見ると襟についてる校章の色が違った。
……2年生…か。
???「パツキンでもなく富士山でもなく！
アタシには美章園　悠子って立派な名前があるのよ！」
「……はぁ」
秋乃「……美章園……さん？……あれ、もしかして……生徒会長さんですか？」
美章園「そうよ！♪」
ふふーん♪と嬉しそうに胸を張る美章園……先輩？
と、言ってもその胸は俺の手の中なんだが。
「すまん、今知った」
美章園「はぁっ!?入学式の生徒会長の言葉でアタシの姿見たでしょ?!」
「寝てた」
美章園「……（ゴゴゴ」
あ、この感じ後ろから来てた怒りオーラに似てるやつだ。
……つまり、俺……詰んだ？高校生活初日から。
……左遷でもされんのかな？……そうはさせんってか！…寒……。

美章園「と言うか!!離れなさーーーーい!!／／／」
グッと力を込めた美章園先輩がようやく立ち上がった。
……馬乗りも悪くないな……いや、感想を求めるものでもないが。
秋乃「……で、でも～…生徒会長さんって、確か入学式の挨拶の時は……」

美章園【生徒会長の美章園です、皆さんご入学おめでとうございます
新たな風と輝く目に私も胸が高鳴りますわ】

秋乃「……って、感じだったのでは……？」
美章園「そうかしら？ちょっと何言ってるか分からないわね」
「なんで分かんねぇんだよ…」
美章園「そんな硬いイメージや設定をしてても辛くなるだけよ
肩が重くって仕方ないわ」
「……いや、それは設定のせいでは無いと……」
美章園「なんか言ったかしら？」
「……いえ、何も……」
この人に言いふらしたりされたらどうなるか分かったもんじゃない……。

美章園「……ま、走ってたアタシにも非はあるわ
今回のところは許してあげる…役得だったようだし、ね？♪」
「……う、うっさいです」
秋乃（こーくんが縮こまってる……）

美章園「ほら、クラスに戻った戻った…授業始まるわよ」
「あ、やべ……！戻るよ、秋乃！」
秋乃「あ、待ってよ～！」

美章園「廊下は走っちゃダメよ～……って、アタシも人の事言えた口じゃないわね
……ふーん……秋乃さんに……こーくん……か……
なんか面白そうになってきたかも♪」

第3話

「……で」

秋乃「ん～～？」

「なんで昼を一緒に食べてるの!?」

秋乃「私が誘ったから～～♪」

朝霧「……」

何も言わずにモグモグ食べる朝霧さん。

……周りの目が痛いなぁ……サウザントサクリファイスってこんな気分なのかな……うん、ちょっと何言ってんだろ、俺。

「……秋乃は毎回行動力がおかしいんよ…」

秋乃「ほえ、そうかな???」

小学校・中学校と【友達１００人作る！】って言ったらホントに1週間で作った時は軽く引いた。

秋乃「学生生活、楽しんだもん勝ちだよ～♪」

少しアホっぽい顔で頬張る秋乃。

その姿を見ていた朝霧さんが少し口を開いた。
朝霧「……2人は……幼馴染、なのかしら…？」
「あ、そんな声なんだ」
朝霧「……」
「……すいません……」
よくよく思えば、自己紹介の時に声聞いたやないか、今の発言はマイナスだぞ、あかびゃ。
秋乃「そうだよ～～♪
もう、10年くらいの付き合いになるかな？」
朝霧「……あぁ、通りで……」
……あの、ジト目でこちらを見られても萎縮するだけなのですが…。

【朝霧　視点】
……ど、どうしよう……完全に冷たい子だと思われたよね……？
……うぅ…昨日の夜に練習するんじゃなかった…。

〝遡ること入学式前日〟

「……表情の練習……しておこうかしら？

……こうかしら？……いえ、もっと……こう……あ、あれ……？」

……まさか練習のし過ぎで表情筋が固まって眉間にシワが寄るなんて……。

怒ってるように見えるわよね……いっその事、このまま押し通すのが賢明かしら……？

（……いえ、でもそれじゃあ……今までと変わらない……）

中学校時代までは……私は注目の的だった。

あまり目立たなかったのにも関わらず、異性からの視線やラブレター……そんなものばっかり見てきた。

（……誰も彼も、見かけだけで判断してる……本当は人に話しかけるのも苦手な引っ込み思案なだけなのに……）

私は、深くため息をついた。

「……えと、大丈夫？」
ため息を漏らした朝霧さんを心配したが……そっぽを向かれてしまった。
「……うぅ……ダメージがでかい……」
秋乃「だらしないなぁ……それでも…」

???「……もしもーし、今ええか？」
「……あ、はい……どちらさん？」
???「あ、メシ食うてる途中やったか？堪忍堪忍！
ちーっと、知ってる顔が見えたもんやから声かけさせてもらったわ！」
（関西弁だ……それも、こってこての……）
???「ウチの名前は松原　茜！1年A組やから隣のクラスに居るんやけど……アンタ、
もしかして……赤鬼ちゃうか!?」
「……はぁ……その名前は辞めてくれ」

茜「ん、あんまり言いたくない事やったか？
それならすまんかった、堪忍してくれ、な？」
謝りながら、松原さんは飴を差し出してきた。
……これも大阪流ってところか？
朝霧「……赤鬼？」
秋乃「あっ、そ、それはね……」
「秋乃、いいよ……まぁ、過ぎたことだし……喋っても」
茜「そんじゃ、隣失礼するで～♪」
!!?!?!?そう言うと松原さんは肩を密着させた。
「!?」
茜「……？……あっ、兄さんこういうの耐性ないタイプなん？♪」
「……い、いいから！」
大阪のノリに合わせてると話が脱線しそうだから俺は昔話を始めることにした。

「……確かに、俺は中学校時代に赤鬼って呼ばれてたよ
でも、別に喧嘩が好きだったとか、そんなんじゃない」
秋乃「……じゃあ、どうして？」

「ただ単に、弱い人や間違ったことに対して力で守りたいと思って強くなっただけだ
……実際、秋乃だって色んな奴に絡まれたりしただろ？……俺はそんな場面が見過ごせなかった、それだけだ」
茜「……ふーん……なるほどな、でもなんで赤鬼って言われるようになったん？」
「勝手に不良共がそう呼んでただけだ……まぁ、実際その名前が広まって喧嘩売ったりする事が無くなったから良いんだけどさ……」
秋乃「じゃあ、よく呼び出されてたのは…」
「勝負しろって……断ったら俺に知ってる人にも危害が加わるかもしれないって思ったら引くに引けなくてな……でも、勝負は1回きり、2度はしないって条件付きで、な」

朝霧「……」
「あぁ、ごめんね……朝霧さん……野蛮な話だったよな」
朝霧「その考えは……」
「え？」
朝霧「その考えは、今も変わってないのかしら？」
「……もう不良……ってか、なんで俺まで不良って呼ばれてたのか謎だけど……俺は強くなった力は正しい物に使いたい……って答えじゃ変かな？」

朝霧「……そう」
茜「気に入った！兄さんの心意気にウチも胸打たれたわ！」
「……打たれるほどの胸は無さそうだけど…」
ぺしーーーーん！
茜「な・ん・や・て～～？」
「……すいません、失言でした……」
秋乃「……あはは……」
朝霧「一言余計なのは残念な要素ね……」
茜「せや！連絡先交換しとこか！何かあったら呼び出させてもらうわ！♪」
「俺は便利屋じゃないんだが……」
茜「細かいことはええから！な？♪」
「……お、おう……」
秋乃「こーくんって流されやすいよね～～」
朝霧「……そんな風に呼んでるの？」
秋乃「うんっ、この呼び方が落ち着くんだ～♪」
朝霧「……貴方もなかなか不思議な人ね……篠原さん」
秋乃「もー、秋乃でいいよ？」

朝霧「……あ、秋乃……さん……」
秋乃「はーい、よく出来ました～♪」
朝霧（……こ、これが普通の対応なのかしら……？）

長かった一日が終わりを迎えようとしていた。
あの後、特に変化はなく……高校生活初日は終わりを迎えた。
そして家に帰ってきて……風呂に上がるとベランダには先客がいた。
秋乃「やっほー♪」
「早いな、今日は」
秋乃「何だか風が気持ちよくてね～♪」
「風邪ひくなよ」
こうして俺と秋乃はベランダに集まっては取り留めのない会話をする。
それが俺たちの日常となっていった。
秋乃「それでそれで？初めて女の子から連絡先を貰った感想は？♪」
「茶化すなよ、それに俺から貰った訳じゃないし」

秋乃「あっはは、だって中学校の時は一匹狼って感じだったこーくんが女の子連絡先交換してるって思うとおかしくって♪」
「……否定できない自分が居る……」
秋乃「それよりさ？」
「それよりってお前なぁ……」
秋乃「部活とか、決めた？」
「……あー、部活かぁ…」
これと言った部活は思い浮かばないなぁ……。
中学時代も帰宅部だったし。

秋乃「部活入って～……そのまま彼女も作ったりして♪」
「気が早すぎるし、俺はそういったものは……」
秋乃「ゼロじゃない、でしょ？♪」
「……も、黙秘で……」
秋乃「あははっ、貰い手がいなかったら私が貰ってあげよ～♪」
「なっ、お前――――――」
秋乃「じゃね～♪」

からかうように笑いながら秋乃は部屋に入ってたった。

「……くっそ～…秋乃のやつ……」

秋乃「……私個人としては……彼女作らないでくれた方がいいんだけどな～……なんて…／／／」

1人ぬいぐるみを抱えながら、ポツリと呟く秋乃だった。

第４話

～放課後～

秋乃「さて、琴美ちゃん
部活どうしよっか？♪」

朝霧「……うーん……なんも興味ないわね……」

冊子に目を通すが、ため息をついて歩く朝霧。

その隣をほのぼのとした顔で歩く秋乃。

秋乃「琴美ちゃんってスポーツもできるし成績も凄くいいのに……勿体ないよ？」

朝霧「そんな事言われても…興味が無い物は興味がないのよ」

秋乃「高校生活は楽しんだ者勝ちだよ♪」

朝霧「……そういうものなのかしらね」

２人で歩いてる中……廊下からうるさい足音が聞こえてきた。

秋乃「……あちゃ～…」

朝霧「……？」

その先に居たのは……。
「……はぁ、はぁ……っ！」
なにか後ろを気にする赤羽の姿だった。
秋乃「……えーっと、琴美ちゃん、ちょっと用心した方がいいかも～……」
朝霧「……は？」
「やべっ……追いつかれそう……！……くそ～っ！」
そして秋乃と朝霧に向かって走り出した赤羽。
「!?……あ、秋乃～！いつもの!!」
秋乃「は～い♪」
ニコニコとした笑顔のまま……秋乃は屈んだ。
「……って！朝霧さんもいたのかっ?!……え～っと……とりあえずスカートを抑えてくれ～～!!!」
朝霧「はっ？……えっ、は???」
赤羽の威圧に負けた琴美は、すぐスカートを押さえた。
すると、屈んだ秋乃の上を捻って飛び越えた赤羽。
屈んでた秋乃が飛び越えた赤羽を見て拍手を送った。
秋乃「おぉ～♪サイドフリップ～♪満点満点♪」

朝霧「……な、なんだったのかしら……」
「秋乃、朝霧さんごめん！……っと～～～～、詫びと埋め合わせは後で!!!」
そう言うと、風のごとく赤羽は走り去った。
秋乃「また後でね～♪」
朝霧「……というか、廊下は走ってはいけないのでは…」
秋乃「まぁ、無理もないと思うよ♪」
そう言うと、赤羽が走ってきた方向を振り向く秋乃。
そこには何組もの部活等のユニフォームを着た部員が……。

【どこいった!?】
【確かこっちに……】
秋乃「……♪」
ニコニコしたまま、拳を握る秋乃……何故だろう、黒いオーラが見えるような気がした。
【……ぐっ……】
【きよ、今日のところはやめとこうぜ……】
【さ、さー……部活部活……】

朝霧「……まさか、あれから逃げてきたとでも？」
秋乃「まぁ、もう中学生の頃からの名物だよね～♪」
朝霧「名物……？」
秋乃「こーくんが体験入学がてら、運動系の部活に行くとね」
【5秒6!?う、ウチにこないか!?】
【3球連続ネット越え……?!】
【全国2位のボクサーを倒したってよ……！】
【黒帯を何人も倒してるって……】
秋乃「って事があってね、あれよあれよの間にスカウトの声が沢山かかっちゃうの」
朝霧「……それで逃げていたと……」
秋乃「あ、ちなみにああやって飛び越えるのはもう3回目だよ♪ブイブイ♪」
朝霧「……誇れることなのかしら？」

【中庭の木陰】
「はーーーっ、はーーーーっ……」
つ、疲れた……放課後に全体力使ってどうするんだ……。
（俺は運動系の部活はやらないって言ってんのに……）
美章園「あら、こんな所でお昼寝かしら、有名人さん♪」
「……会長さん……何の用すか……」
美章園「それとも、赤鬼くんって言った方がいいかしら？」
「それは過去のことなんで、忘れてください……よっと」
起き上がろうとしたが……やめた。
「……んなことより、スカートの中……見えてますよ」
美章園「っ?!／／／
そ、そういうことは思っててもいないのが自分のためでもあるでしょ!?／／／」
……つまり、黙ってたら見放題だったって事か……残念だ。
「会長のキャラ的に黒かと思ってたんですが」
美章園「……あ、あなたねぇ……！／／／
……ふんっ、いいわ……あなたの事は赤鬼じゃなくて、小生意気な1年生って呼んであげるわ」

「……まぁ、ある意味他の生徒は呼ばれないであろう呼び方だから光栄っちゃ……光栄……なのか？」
美章園「……そんな事より、隣……いいかしら？」
「……ん、どうぞ」
そう言うと、会長は俺の隣に腰かけた……それも密着して。
（……これが普通なのか、会長っ!?
いや、待て……冷静になれ……茶化されるのがオチだ……）
美章園「部活、決まってないの？」
「……まぁ、これと言ったのがなくて」
美章園「運動系は？さっきから散々声をかけられたわよ？
見ませんでしたか～って」
「……運動系を選んだところで……結果は目に見えてますから」
美章園「？」
「昔の話です、とりあえずは入る気はありません」
美章園「そ♪」
何故か嬉しそうに笑って立ち上がる会長。
美章園「その未定の席……予約しておいていいかしら？」

「……どういうことですか？」
美章園「いーから、予約しておいていいかしら？♪」
「……はぁ、いいですが」
美章園「約束よ♪近いうちにまた声をかけるわ♪」
そう言うと歩きながら手を振る会長だった。
「……予約？なんか嫌な予感しかしねぇな……ってか、俺もこんな所にずっといる訳にはいかねぇな……帰るか…」

【しばらくしてからの生徒会室】
美章園「戻ったわよ～」
???「その顔は……収穫あり……って、顔だね？♪」
美章園「ええ、それはもう……ね？♪」
???「乗りかかった船だから何も言わないけど……悠子も面白いことを思いつくね」
美章園「青春よ、青春……どうせならバカやって楽しく過ごしたいじゃない」

???「……ふーん……赤羽くん、ね……面白そうじゃん♪」
気だるそうに帰る姿を窓から見て微笑む女子生徒だった……。

【その日の夜】
思いがけない事を聞いた。
「……秋乃も会長から誘われたのか？」
秋乃「うん、詳しいことは聞けてないんだけど、入りたい部活が無いなら、アタシに任せなさいっ！って……」
「……んで、隣にいた朝霧さんも半ば強制でそれに加わってしまったと」
秋乃「ため息ついて頭抱えてたけどね……あはは」

「……そっか、まぁ変なことは言い出さないと思うんだけど……
時に……秋乃さん？」

秋乃「ほへ？」
「なんでこっちの部屋にいるのでしょうか？」
秋乃「……???」
「いや、そんな何言ってるの？みたいな顔されても……
いつもはベランダで話してるよね？」
秋乃「……なんとなく???」
「何となくで年頃の男の部屋に来る女子高生がいるかっ！」
秋乃「はーいっ！♪」
「うん！いい返事！……って違う!!」
秋乃「まぁまぁ、昔の好でさ～♪」
そう言うと、ベットにダイブして早くも寝そうになる秋乃。
「……あの、俺のベット……」
秋乃「？……え、一緒に寝ないのっ!?」
「なんだろう……秋乃って、ズレてるよね」
秋乃「そうかな???」
「自覚ねぇんかい……」

秋乃「それだけ、こーくんの事を信用してるってことさ～♪
おやすみ～っ♪」
そう言うと、本当にそのまま寝てしまった秋乃。
「……ったく、何されても文句言えないんだからな……しないけどさ」
やれやれと肩を落としながら俺も背中合わせで眠りについた。
秋乃「……意気地無し……／／／」

【一方その頃】
朝霧「……はぁ、なんだか2日目なのにどっと疲れた……」
相変わらず表情筋は硬いままだし……。
この先が思いやられるわ……。
???「浮かない顔して、どーしたの？」
朝霧「……アナタには関係無いわ」

???「えへへ、そんな事言って～♪
……あっ、何か……お姉ちゃんから男の人の匂いがする！」
朝霧「は、はぁっ!?……馬鹿なこと言ってないで、寝なさい」
???「誰か男の人と話したりしたの!?お姉ちゃんが!?」
朝霧「……は、話してなんか……っ！……ぁ……」
???（話したんだ……こりゃ、雪でも降るのかな……うししっ、いい事聞いちゃった～♪）
不敵な笑みを浮かべて部屋に戻る……女の子だった。

第5話

悠子「来たわねぇ!!!」

「……」

謎のお誘いを受けた数日後……指定された教室に行くと……仁王立ちで美章園先輩が居た。

「秋乃、帰ろうか」

秋乃「えっ？……あー……うん???」

悠子「待てぇーい!!」

思い切り首根っこを掴まれた。

どうやら、この生徒会長はかげふみの特性を持っているようだ。

悠子「アタシの話を聞けぇ!!」

「何度も確認しますけど、本当に朝の朝礼で凛々しい姿を見せてた生徒会長ですよね？ドッペルゲンガーとかじゃないですよね？」

悠子「ちなみにあの後戻ってミルクティーを一気飲みしたわ」

「……想像つかねぇ……つーか、聞きたくなかった……」

悠子「あら、凛々しいアタシをめちゃくちゃにしたいって魂胆かしらっ!?」
「秋乃、そろそろいいか?」
秋乃「こ、拳をしまって〜!!」
悠子「残念だけどアタシはMではないわ!」
「聞いてないっす」
悠子「Lよ!」
「もっと聞いてないっす……って、L?」
悠子「好きなポテトのサイズ」
「収集つかねーよ!!!」
???「やれやれ、賑やかすぎて廊下の先まで聞こえてたよ?」
「……誰だ?……って、あれ……どっかで見たような……」
そこには茶色の髪の毛をした……男?
「いや、胸があるな……」
???「変な分析ありがとうね、後輩くん」
秋乃「あれ、副会長さん?」
「副会長……?……あー、そういや居た気がした」
悠子「……貴方はもう少し人の顔を覚えるってことをした方がいいわよ?」

「ガチトーンで心配しないでくださいよ……」
???「あはは、まぁまぁ……私の名前は西宮　瀬良（にしのみや　せら）
君達がメンバー候補……ってこと、かな？」
秋乃「……メン、バー……？」
「なんか闇のグループにでも入れようとしてます？」
瀬良「あれ、まだ話してないの？
も～……ダメだよ、悠子？」
悠子「だって浩二の助が突っ込むんだもん……あ、変な意味じゃないわよ？」
「……もう突っ込まん……絶対突っ込まん……」
秋乃「……つまりこの教室って……」
悠子「立ち話の何でしょ？入って？」
「……怪しいけど……失礼します……」
すると、そこには……。
「あ、朝霧ぃ……?!……さん……」
朝霧「……」
あ、今完全にムッとした。
居ちゃ悪い？みたいな顔してる、まずい。

「……」
悠子「逃がすかっ」
「いってぇ！」
くそ、行動パターンはお見通しかよ……。
悠子「さて、メンバーは……ん、元気っ子は？」
瀬良「言ったでしょ？ソフトボール部だって」
悠子「おぉっ、そうだった！……じゃあ、元気っ子抜きで話を進めましょう」
「……いや、あの～……」
悠子「どうしたのかしら、浩二の助」
「……」
悠子「んもう、怪訝な顔しないの」
「……あの子は……どちらさん？」
そこには、フードを被って……何やら2本のダウジングマシンを持った子が……。
悠子「あぁ、彼女は……って、自己紹介させるのは難しいから代弁するわ
1年A組の御影　命（みかげ　みこと）よ」
と、言われたが……まるで目も合わせないし……会釈もない。

「……生きてますよね？」
悠子「貴方時々デリカシー無いって言われない？」
「……うぐっ」
秋乃「やーいやーい」
「……と、とにかく！……これはなんの集まりなんですかっ！」
悠子「やっと、話が本題に入ったわね～
そうね……アタシ、部活が作りたいの！」
「……こりゃまた、突拍子も無いお話を……」
悠子「そして、ここにいるのはその部活設立に選ばれたメンバー！」
瀬良「候補だけどね」
悠子「んもうっ、細かい事はいいのよ！」
「……んで、何の部活なんですか？ミステリー研究部すか？」
悠子「違うわよ！もっとこう……ロマンのある部活よ！」
……ロマン……ねぇ……。
秋乃「……んー……うちの学校って、結構部活の種類があるから……見当が付かないんですが……」
悠子「瀬良！説明しておやり！」

「敵キャラかよ」
瀬良「えっとね、私たちは高校生だよね？」
秋乃「そうですね？」
瀬良「高校生にしかできないことや高校生になってから出来るようなこととかってあると思うんだ」
「分かった、カチコミだな？」
悠子「過激派思想はレッドカードよ？」
「冗談やって」
瀬良「そこで生徒会長の悠子と私が出した結論が――――」
悠子「〝恋愛〟よ！」
「……あの、副会長さん？つかぬ事をお伺いしますが」
瀬良「ん？どうしたんだい、後輩くん」
悠子「無視ぃー?!」
「この暴走生徒会長さんとは以前からのお知り合いで？」
悠子「あれ、アタシディスられた？泣くよ？泣くよ???」
瀬良「うん、幼馴染だよ……と、言っても腐れ縁だけどね」
秋乃「わ～っ、私たちと同じですねっ♪」

瀬良「お互いに気苦労が絶えないね～」
秋乃「はい～♪」
悠子「……一緒に泣きましょう、浩二の助」
「嫌です」
悠子「殺生!!」
朝霧「……それで？それがこのメンバーとなんの関係に？」
悠子「よくぞ聞いてくれたっ！……そう、このメンバー7人で……高校生の初々しくも甘酸っぱい胸踊るような恋愛について研究する部活動！
通称，恋愛研究部，を設立するわよ！」
朝霧「失礼します」
呆れた声で立ち上がった朝霧さんの足に生徒会長がしがみつく。
悠子「そんな事言わないで～っ！生徒会長を助けると思ってさ～!!」
「……生徒会長の威厳はゼロだけどな」
瀬良「悠子……」
朝霧「大体、私にそんな要素はないと思いますが」
悠子「あら、そう？鏡に向かって指で口角上げてため息ついてたのに？」
朝霧「……記憶にございません、もしくは記憶を抹消しましょうか？」

語気を少し強める朝霧さん……でも、少し声が震えていた。
「……なんか、朝霧さんって近寄り難いって感じないね」
朝霧「珍しい印象の持ち主ね、額縁に入れて標本として飾ってあげるわ」
「……」
……俺にだけ厳しくない？男だから？
悠子「……で、入るの？入らないの？」
朝霧「……」
瀬良「幽霊部員でもいいから……ね？」
朝霧「……読書をするスペースとして使わせてもらいます」
悠子「さっすが――――」
朝霧「でも、少しでもうるさくしたら生徒会長を本の角でぶちます」
悠子「ひいぃ！」
「……あぁ、また威厳が……」
秋乃「私も入ろうかな」
「……マジ？」
秋乃「なんか退屈しなそうだし♪」
「……ええ……」

悠子「浩二も入っておけば、役得かもしれないわよ？」
「……さらっと名前呼びにするから危うくスルーするところだったぞ」
瀬良「そうだね……，唯一の男子部員，だし」
「……え？」
悠子「生徒会長のアタシが直々に指名した唯一の男子部員よ？
これを拒否するなんて……ねぇ？」
ニヤニヤと頬杖をついてこちらを見る生徒会長。
「……分かったよ、体験入部な、体験入部」
悠子「よし、決まりね！部長決めましょ！部長！」
「……えっ、言い出しっぺの生徒会長が部長じゃないの？」
悠子「いいじゃない、こういうのやって見たかったんだから！」
「……はぁ」
命「……」
すると、御影さんがダウジングマシンを俺らの方に向けてきた。
悠子「あら、いいわね
これで決めましょ！」
「んな、適当な……」

秋乃や副会長さんに……少し反応を示した。
「いや、ダウジングマシンって人にも反応するのか？」
悠子「さぁ？」
「さぁって……」
そして、朝霧さんや生徒会長には無反応だった。
「何となく……生徒会長が無反応なのは納得出来るかも」
悠子「次、生徒会長呼びしたら張り手ね？」
「……どうしろと」
悠子「そこは自分で考えなさ～い♪」
そして……御影さんが俺の前にダウジングマシンを向けると……
命「……!!」
何と、何度もぐるぐるとダウジングマシンが回り始めた。
悠子「決定！」
「……」

「はぁあああああぁ
!!!!?!?!?!?!?!?!?」

第6話

「ぜっっっっっったい行かない!!」
　秋乃「まだ言ってる～…」
「あんな方法で選ばれた部長なんかやるかっ！今日から幽霊部員じゃ！」
　秋乃「美章園先輩に怒られちゃうよ～」
「知るかっ！」
　秋乃「あっ、どこ行くの～っ!?」

【校庭】
「ったく、なんで俺が……」
　必ず来るように言われてる訳でもないし、生徒会長・・・悠子先輩も諦めるだろ。
「そもそも、俺は体験入部だ――――――」

その時、足元にボールが転がってきた。
「…ソフトボール？」
茜「すまん、すまん！取ってーや！」
「…松原？」
茜「おっ、兄さんやんけ！何しとるん？」
「（部活サボってるとか言うと面倒なことになりそうだな…）ブラついてるだけ」
茜「お、そかそか！♪
ボール返してや～♪」
落ちてたボールを手に取る。
茜「ばっちこーい!!♪」
「…怪我しても知らないぞ」
振りかぶって腕を振ると…。

ツパァァァァアンッ！
乾いた革の音と共にグローブの中にボールが収まった。
茜「……～っ！…バケモンみたいな球投げるなぁ～っ…」
「んじゃ、俺はこれで」

茜「そういや、兄さん？部活は結局なににしたんや？」
「…んぐ…っ（恋愛研究部…とか言えない）
入ってないよ、帰宅部だ…んじゃな」
茜「…ほーん、生徒会長のねーちゃんが言ってた強くて頼もしくて理想のただ1人の男子部員かと思ったんやがなぁ…」

「…あれ、ちょっと待てよ…？」
そういや悠子先輩が言ってた気が…。
悠子【ソフトボール部の元気っ子は～――――――】
「…いやいやいや…まさか、なぁ…？」

【部活】

ホワイトボードには、大きな字でこう書かれていた…。

悠子「’’可愛い’’とは!!!!!」

……シーン。

場の雰囲気にヒヨコが3匹トコトコ歩いてそうなくらいの沈黙。

悠子「……もーーーー!!!なんでこんな時に、浩二は居ないのよ〜!!」

椅子に座りながらジタバタする悠子。

相変わらず生徒会長の威厳は微塵もない。

秋乃「部長になったことが不服のようで…」

悠子「あんの不良少年め〜…」

瀬良「…しょうがないなぁ、探してきてあげるよ」

悠子「えっ、心当たりあるの!?」

瀬良「こういう時の後輩くんの行動パターンは読めるよ、何となく、ね♪」

そう言うと、西宮は部室を後にした。

秋乃「…あの、今だから聞けるんですけど…何でこーくんをこの部活に…?」

悠子「そうね、朝霧さんも気になってるみたいだし、答えましょうか」

琴美「紙で指切ると痛いですよね」
悠子「秋乃ちゃん、この子過激!!ねぇ、過激!!」
秋乃（威厳ないなぁ…）
悠子「…コホン、あの子を選んだ理由だけど…直感よ
第六感でも閃きでもニュータイプでも何でもいいわ」
琴美「安直な…」
悠子「そうかしら？私としては選んで正解だったと思うわ
正直、楽しくて堪らないわ」
秋乃「…うぅーん…こーくんが乗り気になるとは思えないけど…」
悠子「ふっふっふ…不貞腐れてへそ曲げてるのも今のうちよ…」
命「……」
秋乃「美章園先輩、顔が悪キャラになってます」
悠子「はっ、いけないいけない…」
琴美（騒がしい…）

【保健室】

「……」

ここが落ち着く。

とりあえず少し寝てから帰ろう。

(…って、まんま不良っぽいな、俺)

まぁ、今更周りの見方が変えようとか思わないが。

ガラガラ…。

(ん、保健室の先生でも帰ってきたか?…まぁ、いいや…寝よ)

瀬良「みーつけたっ」

「…副会長さん」

瀬良「ダメだよ、おサボりは?」

「…説教すか」

瀬良「ふふっ、うそうそ♪

まぁ、悠子に振り回されてるから疲れるよね♪」
「…あの、なんで頭撫でてるんすか」
瀬良「寝顔が可愛いなあって♪」
「……」
瀬良「意外とこういう時は子供っぽいんだね？いいこと知っちゃった♪」
「……」
瀬良「あ、寝返り打たないでよ～」
「…副会長さんってそんな感じだったんですね」
と、背中越しに言ったら…西宮は耳元に顔を近づけた。
瀬良「君だけに…かも、よ？♪」
「…っ」
瀬良「あははっ！顔真っ赤！♪」
「あ、あのなぁっ！」
瀬良「…先輩を襲っちゃうのかな誰もいない部屋で～～…？♪」
「…～っ！」
ダメだ、副会長さんのペースに飲まれそうだ。
瀬良「さっ、部室に戻ろうかな…キミも戻る…よね？♪」

「…分かりましたよ」
瀬良「物分りのいい後輩くんは、好きだよ♪」
「……」
副会長って…いつもこんな感じなのだろうか…。

【部室】

瀬良「連れてきたよ～」
悠子「ホントに連れてきたの!?」
秋乃「あはは、こーくん借りてきた猫みた～い」
「…ったく…」
悠子「はい、浩二！可愛いとは!!??」
手をマイクのように差し出す悠子先輩。
「…え?」
悠子「可愛い、とはっ！」
「…可愛いって…朝霧さんや秋乃や副会長さんの事を言うんじゃないのか?」

秋乃「…／／／」
瀬良「…たはは～…」
琴美「悪意無く言ってるのが怖いわね」
「…え？」
悠子「ね～え～っ!!!アタシは～っ!?!?!?!?」
「…えっと…デカい??」
悠子「――――――――――――」
ピキっと固まる悠子先輩。
そのまま、副会長さんのところを歩み寄った。

悠子「瀬良～ぁ…後輩に汚されちゃう～…」
瀬良「言い方言い方」
「…なんか俺不味いこと言ったかな？」
秋乃「９９．９％こーくんが悪いよ」
「えぇっ!?!?!?」
琴美「自覚無し…重症ね」

ガラガラっ。

茜「すんまへん！遅うなりました～！」

「…あ」

茜「ん？……あぁ～!!!!」

第7話

茜「なんやなんや、兄さんもこの部活入ってたやんけ～！♪」
「ヒトチガイデス」
茜「あっ、もしかして…恋愛研究部に入ってるって言うのが恥ずかったんか!?可愛いとこあるやんか～♪」
そう言って肩に手を回す松原。
…密着してる面が少ないと言うと怒られそうなのでやめておこう…。
悠子「あら、もう元気っ子まで手の内に収めたのかしら？」
「語弊を生む言い方は勘弁してくれ…」
茜「元気っ子ちゃうって！茜って名前言うとるやんけ～！」
悠子「今日も元気ね～」
茜「…あかん、この会長はん話聞いとらんわ」
秋乃「げ、元気なのはいい事だよ～っ」
瀬良「…さて、全員揃ったし…どうする？」
悠子「決まってるわ!!!青春するわよ!!」

「…嫌な予感しかしない…」
悠子「はい、部長これ引いて！」
「…いや、だから、俺は部長になったつもりは……って、何これ？」
箱に入ってるのは、三本の棒…え、くじ引き？
悠子「はい、行っちゃって、行っちゃって！♪」
「ノリが宴会なんだよ…こうか？」
そこには【カラオケ】と書かれていた。
悠子「はい、決まり！瀬良！」
瀬良「はいはい、予約ね」
琴美「……」
悠子「逃がすかぁ！」
琴美「お断りよ！なんで私まで行かなくちゃいけないの！」
おお、多分マジの怒り顔だ。
「流石に急すぎないすか？」
悠子「わかったよぉ…じゃあ明日ね！」
めげないな、この人も。
琴美「……」

悠子「お願い！一生のお願いだから！」
瀬良「そんな事に一生のお願いを使うなんて…」
悠子「ほら、部長からも一言言いなさいよ！」
「横暴だ…えっと、朝霧…これも付き合いってことで…
今回切りでいいから、さ…ね？」
琴美「……」
あ、ダメみたいな顔して――――――――。
琴美「今回きりよ」
「……え？」
悠子「浩二、でかしたぁ！」
「えぇ…」
秋乃「えぇ～…」
瀬良「素直じゃないなぁ～」
琴美「……」
一言、今回きりと言って朝霧はそっぽを向いてしまった。
…でも、なんでＯＫしてくれたんだろう…。

【次の日……】

悠子「あっははは～！部長、飲み物持ってこーい！♪」
上機嫌で端末をいじる悠子先輩。
…で、部長兼パシリって事ね…とほほ。
秋乃「こーくん、私も行こっか？」
「大丈夫大丈夫、男の務めってやつだしな……それよりも…」
悠子先輩の足組み…うぅ、目のやり場に困る…。
副会長さんもタイツで足組みとか…。
「…と、取りに行ってくる！」
茜「…？…なんや、兄さん…あんなに慌てて」
秋乃「露骨に分かりやすい反応するんだから…」

悠子「さて、最初は誰から歌うのかしら!?」
瀬良「命ちゃんは…ありゃ、既にタンバリン持ってるし」
悠子「盛り上げ役は任したわ！」
瀬良「…そういえば、琴美さんの歌声って綺麗って聞いたんだけど…」
琴美「人並みです、特段上手いわけでもありません」
悠子「そう言うならトップバッターやりなさーい！
これは先輩命令よーっ！♪」
琴美「…はぁ…」

【その頃】

「な、7人分のぉ…飲み物を持ってくとか…落とさないように…っ！」
カタカタとトレイを震わせながら部屋に向かう…。
「…ん、この声…朝霧さんか?」
ドア越しでも分かる…透き通った声…。

（みんなが胸打たれる気持ちが分かるような気もする…けど、本人は疎ましいとか思ってるんだろうなぁ…）

何とかかんとか、ドアを開ける…と、ちょうど歌い終わっていた。
悠子「ご苦労～！いやぁ、タイミング悪かったねぇ～！♪」
瀬良「あ、それが目的だったんだ」
悠子「さぁ～ねぇ～？」
「大丈夫ですよ、綺麗な歌声、聞こえてたんで
…ほら、歌い終わったなら喉潤わせておいたら？」
琴美「…何で何も言ってないのに飲み物が」
「いつも飲んでるだろ？それ」
琴美「……そ」
ツンケンとした反応で飲み物を飲む朝霧さん。
琴美「……けほっ…」
あ、むせた。
琴美「…じっと見ないでちょうだい」
「あ、あぁ、すいません…」

悠子「少年っっっっ、歌え！」
「だからノリが宴会なんですよ…」
秋乃「こーくんも、歌上手いからねぇ～♪」
瀬良「ハードル上げてるねぇ」
茜「おっしゃ、カメラ回したろ！」
「やーめーーーろやーーー」
と言いつつ、得意な歌を慣れた手つきで打ち込んでいく。
悠子「うわっ、女子ウケかよ！」
「もう1回聞いておきますけど、本当に生徒会長ですよね??」
悠子「まぁ、あの子の後だから普通の歌声に聞こえ――――」

瀬良「…いや、そうでもないみたいだよ」
茜「ほーん…」
命「……（シャンシャン」
琴美「…」
秋乃「いやぁ、何度聴いてもこーくんの歌声はいいねぇ♪」
「…茶化すなよ、見られて緊張してるんだから」

悠子「……い、今から軽音楽部目指さない???」
瀬良「軽音楽部に怒られるよ?」
悠子「な、なによ、なによー!そんなに歌が上手いって聞いてないんだけどー!!」
「聞いてないって…今歌ったばかりだからな」
悠子「むむむ…生徒会長極秘調査が甘かったか…」
「聞き捨てならないワードが出た気がしたんだけど…」
悠子「そうだ! 琴美ちゃんと浩二がデュエットしてみたらバズるんじゃないかしら!?」
「アップロードする気もないですし、彼女の意志を優先させてあげましょうよ」
悠子「けっ、色男が!」
「貶し方が中学生なんすよ」
琴美「いいわ、歌いましょ」
「えええ、ええ、え? 朝霧さん?」
琴美「…?…何不思議がってるのよ、カラオケきたら歌うのは当然でしょ?」
「…あ、うう、うん???」

半ば流されるように…一緒に歌うこととなった。

途中目が合って…なんとも言えない気持ちになってしまった…。

【その帰り道】

琴美「送ってくれなんて言ってないのだけれど」
「女の子1人で帰す訳にも行かないだろ？」
琴美「だからって、わざわざ家とは反対の方向なのにそこまでしなくても」
「勝手なお節介だ、気にするな」
琴美「…変なの」
「かもな」
???「あ、お姉ちゃんだー！♪」
琴美「…っ！」
「…お姉ちゃん？」

???「あれあれ…もしかして…この人が…」
琴美「……」
???「むぐーー!!」
その刹那、朝霧さんが女の子の口を塞いだ。
琴美「お喋りが過ぎるわよ、聖美（まさみ）」
聖美「まだ何も言ってないのにー！」
琴美「貴方が口を開くと、ろくな事がないから」
「…えっと、お知り合い？」
聖美「あっ、はじめまして！♪朝霧　琴美の妹
朝霧　聖美、１５歳　中学３年生でーすっ♪よろしくね、お兄ちゃん！」
琴美「…ちょっと」
聖美「わー！逃げろー！♪」
そう言うと、すぐ横の家に入っていった。
「…お、おぅ…」
琴美「言いそびれたわ、ここ、ウチだから」
「…そ、そっか…」
琴美「…その、あの子の事は気にしなくていいわ、いつもあんな調子だから」

「…姉妹似てないね…」
琴美「よく言われるわ」
「…じゃあ、俺はこれで」
琴美「…あの」
「ん？」
琴美「…その、また明日…」
「お……おうっ！また明日な」

【琴美　部屋】

琴美「はぁあああああああ…塩対応すぎるよ…」
聖美「またやってる」
琴美「あ、貴方ねぇ！」
聖美「せっかくパス出したのに～」

琴美「…う、うぅっ…」
聖美「ヘタレ～」
琴美「む、無茶よ！これでも頑張った方なのに！」
聖美「はぁーあ、お姉ちゃんがこんな調子ならアタシが奪っちゃおうかな～？」
琴美「…っ!?…べ、べべべべ、別にそんな気は無い…し…！」
聖美（この反応が面白くて可愛いから、いじりたくなっちゃうんだよなぁ…）